

「嫁」から「女性」へ
—大分県の農村女性起業グループの挑戦と葛藤—
15RB108 川合里沙 指導教員 藤掛洋子

【背景と目的】 農村の少子高齢化・過疎化を背景に大分県では、1979年故・平松守彦氏が一村一品運動を提唱した。この運動は、先行する同県の大山町、湯布院町の地域づくりをモデルに「自主自立・創意工夫」「ローカルにしてグローバル」「人づくり」を理念とする地域づくり運動である。名前の分かりやすさや内発的地域づくりの手法として注目され国内のみならず、海外30か国以上にも取り入れられている。

運動開始から約40年経ち、政治・経済・経営・国際開発・ジェンダー等様々な分野から研究の蓄積がされてきた。平松氏が「人づくり」に力を入れたことから経済効果は一過性であるという指摘が多くされるものの、地域の課題解決に取り組む住民の育成には一定の評価がある。特に大分県では農村女性起業家が1990年代後半に全国第3位・九州第1位となり同運動は「女性の地位向上に繋がった」と評価されている。しかしながら、農村女性起業グループの活動やエンパワーメントはあまり明らかにされてこなかった。そこで本研究は、富士谷(2001)が大分県の一村一品運動と農村女性に実施した調査研究に基づき、現代の視点からエンパワーメントを再検討することを目的とする。また、語り分析から女性たちの社会・ジェンダー規範の変容も明らかにしていく。

【方法】 文献調査とフィールド調査を実施した。

(2015/09/03-05, 2016/09/05-11, 10/16-24) フィールド調査では、工房や農業祭の参与観察、食品加工・販売に従事する6つの女性グループ計10人に半構造インタビュー調査を行った。女性グループの状況を多角的に理解するため、一村一品運動や生活改善普及事業の関係者7人にも半構造インタビュー調査を行った。

【結果及び考察】 文献調査及びフィールド調査から以下のことが明らかになった。「一村一品運動によって女性の地位向上に繋がった」と言われてきたが、実際は生活改良普及事業、女性の地位向上に向けた国際的な潮流が大きく女性達の起業に関与していた。農村女性の起業には、都市部の女性より多くの起業阻害要因がある。生活改良普及員と一村一品運動による行政の支援によって阻害要因は解消され、女性たちの起業の珍しかった1980年代から起業が活発になるきっかけとなっていた。

語りの分析から、起業によって女性達は家庭や地域内で限定的なエンパワーメントが起きていることが明らかになった。一村一品運動によって旧態依然であった農村の社会・ジェンダー規範に変容が起き、女性が外で起業活動を行うことが受容されるようになったためである。その一方で女性達の中には「男女平等ということも分かるけど、子育てや介護は私がやること」という意識が現在もある。ダブルバインドの社会・ジェンダー規範の中で女性達は日々の生活を営んでおり、社会構造全体の変容までには至っていない。今後の女性起業グループの課題は、高齢化と外部環境の変化による活動の継続である。地域の特産品を生み出し、工房が地域住民や他県の住民との交流の場ともなっているため、女性達の活動の存続は地域にも影響を及ぼすことが推測される。

【結論】 一村一品運動による起業は女性達にとって、生き甲斐となっている。調査から、女性達は単に楽しむだけでなく様々な葛藤を抱えながらも、平松氏の「継続は力なり」を合言葉に仲間と共に挑戦を続け今日に至るまで活動を続けてきていた。女性達は活動を続けるのか、追加の検証を今後の課題としたい。